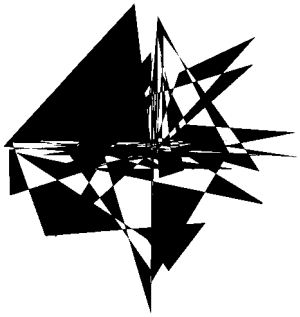

イスラームの聖者マウラーナー・ジャラールッディーン・ルーミー

東京大学大学院　人文社会系研究科
教授　**竹　下　政　孝**

１．ユネスコ国際マウラーナー年

昨年（2007年）は，マウラーナー・ジャラールッディーン・ルーミーの生誕800周年の年であり，それを記念して，第33回ユネスコ総会で，2007年を「ユネスコ国際マウラーナー年」として祝うことが決められた。この１年間で，アメリカ，イギリス，フランスなど欧米諸国，トルコ，イラン，アフガニスタン，中央アジアの各国，インド・パキスタンなど，世界各国において生誕を祝う多くの記念事業が開催された。残念ながら，ユネスコの認定する世界遺産には大騒ぎをする日本では，このユネスコ認定の「マウラーナー年」には，何の関心も示されず，ほとんど何の記念行事も行われなかった。メウラーナーの日本における知名度がほとんどないことを考えると仕方がないことかもしれないが，マウラーナーは，シェイクスピアやゲーテに比肩する世界的な大文学者であると同時に，現在でも宗教の枠を超えて多くの人々を引き付ける聖者である。ある報道によると，アメリカで最も読まれている詩人はマウラーナーであるという。確かに，アマゾンで「ルーミー」を検索すると，100冊を超える本がヒットするし，しかもそれらの大部分が，いわゆる学術書ではなく，一般の人が心の糧として読む種類の本である。中にはルーミー・カレンダーというものまである。昨年世界各国で，その生誕が祝われたマウラーナー・ジャラールッディーン・ルーミーとはどのような人物なのだろうか。

２．ルーミーかバルヒーか

中世のイスラーム世界の人物を語る時，われわれ日本人にとって難解なのはまずその名前である。マウラーナー・ジャラールッディーン・ルーミーの場合，一般にイスラーム世界では，「マウラーナー」と呼ばれている。「マウラーナー」とは尊称で，アラビア語の原義は「われわれの師」である。このアラビア語が訛って，ペルシャ語では「メウラーナー」，トルコ語では「メヴラーナ」となる。欧米では一般的に「ルーミー」として知られているが，「ルーミー」の原義は「ルームの人」ということである。ルームは，「ローマ」を指すアラビア語で，東ローマ帝国，つまりビザンチン帝国をアラブ人がそう呼んだのである。マウラーナーが生涯の大部分を過ごしたのはアナトリア（現在のトルコ）のコンヤという町であり，当時はルーム・セルジュク朝の都であったが，かつてはビザンチン帝国に属していたので，この町の出身者はルーミーと呼ばれたのである。しかし，マウラーナーをルーミーと呼ぶことにイラン人や，アフガン人，中央アジアの人たちは強く反対する。実際イランでは，「ルーミー」とはまず言わない。なぜなら，マウラーナーの生誕地はコンヤではなく，現在のアフガニスタンの北部にある古都バルフと考えられているからである。それゆえ彼らは，

ルーミーの肖像

「ルーミー」ではなく,「バルヒー」（バルフ出身者）と呼ぶ。ペルシャ語で書かれた本では，この聖者の正式名称は，メウラーナー・ジャラールッディーン・バルヒーである。しかし，トルコ人にとっては，もちろんバルヒーではなく，ルーミーである。おそらくヨーロッパはルーミーの名前をオスマン朝から学んだのでバルヒーではなく，ルーミーが一般的になったのであろう。また，ユネスコが2007年を「国際ルーミー年」ではなく,「国際マウラーナー年」としたのも，イランや中央アジアの国々の気持ちを配慮したのであろう。この名称の複雑さは，マウラーナーがどの民族に属していたかという問題にも関連してくる。現在，少なくともイラン，アフガニスタン，タジキスタン，トルコの４つの国々が，マウラーナーを自国の偉人として顕彰する。イラン人にとって，ペルシャ語で詩作したマウラーナーは,イラン人であり,マウラーナーの作品はイランの国民文学の一部である。アフガニスタンが，マウラーナーを自国人と考えるのは，生誕地と一般的にみなされているバルフが現在のアフガニスタンであるから不思議ではない。タジキスタンは，一見マウラーナーとは無関係のようにもみえるが，最近の説によると，たしかにマウラーナーの父や祖父はバルフ出身であるが，マウラーナー自身は，現在のタジキスタンの首都ドシャンベに近い小都市ヴァフシュで生まれたという。また，タジク語は，近代ペルシャ語の古い形を保存した言語であり，中央アジアのイラン文化の継承者として，タジキスタンの人々がマウラーナーを自分たちのものであると考えるのも十分理解できる。最後にトルコは，マウラーナーが生涯の大部分を過ごした土地，骨を埋めた地，現在までもその子孫が存在している地，そしてなによりも，マウラーナーを開祖とするメウレヴィー教団の本拠地であることを根拠に，マウラーナーがトルコ人であると主張する。トルコ人にとって問題は，マウラーナーの詩や散文がすべてトルコ語ではなく,ペルシャ語で書かれていることだが，日本人でもかつては多くの知識人が漢文で詩作したように，ルーム・セルジュク朝の知識人がペルシャ語で詩作したのは当時の習慣であると考えられるので，マウラーナーがトルコ人であることの障壁とはならない。歴代のオスマン朝のスルタンも，ペルシャ語で詩作しているのである。マウラーナーのペルシャ語の詩は，多くのトルコの詩人によって，トルコ語に訳され，現代のトルコ人は，トルコ語によってマウラーナーの著作に親しんでいる。おそらくマウラーナーへの敬愛が最も高い国はトルコではないだろうか。昨年の「マウラーナー年」で最大の記念式典を開催したのもトルコだし，マウラーナー年を記念して，メウレヴィー教団の旋回舞

踊団を日本にまで派遣して公演を主催したのもトルコである。もちろん，マウラーナーの時代には，現在のような国民国家は存在しなかったので，マウラーナーの国籍，民族性を問うこと自体は愚問であるが，マウラーナーが，「東方イスラーム世界」で特に現在まで愛されていることは，マウラーナー年の記念事業を行った国々の地理的分布をみてわかる。インド・パキスタン，中央アジア，トルコは，ペルシャ語の文化の影響を強く受けた地域である。それに対して，アラブ諸国ではマウラーナーの知名度はそれほど高くはない。

さて，「ルーミー」がイランや中央アジアでは使われない名前であることはわかっていただけたと思うが，欧米を経由してイスラーム文化を知った日本では，マウラーナーという名前より，ルーミーという名前の方が一般的であり，各種の辞典類にも「ルーミー」で立項してあると思われるので，本稿でもこれ以降は「ルーミー」という名前を使うことにする。

３．ルーミーの生涯

ルーミーは，前述したように，1207年，中央アジアのヴァフシュに生まれた。一家は，ルーミーが５才のとき，大都市サマルカンドに移る。彼の父，バハーッディーンは，説教師であり，また学者であった。当時の中央アジアは，フワーリズム朝，カラハン朝，グール朝などの抗争状態にあり，政情は安定していなかった。サマルカンドもカラハン朝から，フワーリズム朝の支配下に移る。家族がサマルカンドに移り住んでからおよそ５，６年後に，かれらは，故郷の中央アジアを去って，西方へと放浪の旅に出る。なぜ，バハーッディーンが，まだ幼いルーミーを連れて，また多くの弟子たちをも引き連れて目的地も定めない旅に出たのか理由はわからない。フワーリズム朝の宮廷の政争にまきこまれたのであろうか。あるいは，迫りくるチンギスカーン率いるモンゴル軍の襲来を予期したのであろうか。彼らが最初に向かったのは，アッバース朝カリフの坐している，イスラーム世界の中心であるバグダードであった。そこからさらに，メッカに巡礼をおこない，シリアへと戻り，1220年ごろに，ルーム・セルジュク朝の支配下にあった，アナトリアの小都市ラーレンデ（現在はカラマンと呼ばれているトルコの都市）に腰を落ち着ける。ルーミーが17才でゴウハル・ハートゥンと結婚し，２人の子供をもうけたのはこの町である。また，ルーミーの母であるモーメネ・ハートゥンが亡くなったのもこの町である。バハーアッディーンは，この町の支配者が彼のために建てた神学校で教鞭をとるが，1228年，ルーム・セルジュク朝の首都であるコンヤに，スルタン・アラーッディーン・カイクバードが新しく建てた神学校に招聘され，家族は，コンヤに移住する。しかし，それから２年後，長い放浪の旅に疲れたのか，バハーッディーンは亡くなる。このとき，ルーミーは24才であったが，すでに一廉の学者であったので父の遺志で，父の後を継いで神学校で教えることになる。しかし，その１年後に中央アジアから，バハーッディーンの教え子であったブルハーヌッディーンがコンヤにやってきて，ルーミーは彼の助言によって，シリアでさらに３年間学問の磨きをかける。シリアから戻ってきたルーミーにブルハーヌッディーンは，断食や，隠遁（40日の間，部屋に閉じこもって瞑想すること）などの修行を課して，内面の道を磨かせたのち，ルーミーは再び，コンヤの神学校の教壇にたつ。このままでは，ルーミーは，平凡な学者としての生涯を終わっていたかもしれない。しかし，彼を禁欲的な学者から，陶酔的な神秘主義詩人へと変える運命的な出来事が起こる。それは，放浪の托鉢僧，シャムス・タブリージーとの運命的な出会いである。

ルーミーを熱狂させた謎の人，シャムスの生

年は知られていない。しかし，彼が，コンヤにやってきて，ルーミーと出会った日は記念すべき日として後世に伝えられることになった。それは，1224年11月29日のことであった。この日，コンヤに着いたシャムスは，米商人の宿に旅装を解き，その隣にあった小さな店で休んでいるときに，ちょうど講義を終えて，学生たちを後ろに引き連れ，馬に乗ってそこを通りかかったルーミーと出会ったという。シャムス自身の伝えるところによると，最初にシャムスがルーミーに放った言葉は次のような質問だった。「アブーヤジード（ビスターミー）が預言者ムハンマドの模範に従う必要がなかったのはどうしてか。どうして彼は，［ムハンマドの模範に従って］，「汝（神）に栄光あれ」とか，「私は汝を崇拝する」と言わなかったのか」というものであった。また，一説によると，質問は端的に「アブー・ヤジード・ビスターミーと預言者ムハンマドとどちらが偉いか」だったともいう。ルーミーはこの質問に含まれている含蓄を理解し，酔いしれた。バスターミー（874年没）は初期の神秘主義者で，神と合一した陶酔の境地で発した有名な言葉「我に栄光あれ。我を崇拝せよ」によって知られている。この言葉は，文字通り解釈すれば，ビスターミーは自分が神であると言っていることになるが，後の神秘主義者たちの解釈では，この言葉を発したときビスターミーの「自我」は消滅していて，語っているのは神自身である。この質問の後に続く禅問答にも似た二人の対話は省略しよう。ルーミーの答えを聞いたシャムスは，気を失って倒れてしまい，ルーミーは，馬上から降り，ひざまずいて，シャムスを起こす。二人はかたく抱擁する。（一説によれば，対話中に気を失って倒れたのはルーミーの方だという）。ルーミーは，シャムスを家に連れて行き，以後ルーミーは，学校での講義も忘れて，シャムスと二人だけで，何週間，何か月も部屋に引きこもってしまう。このとき，シャムスは60歳を超えていたといわれる。ルーミーは，この老人のどこに心を奪われたのであろうか。ルーミーの多くの門人たちにも，師のシャムスに対する熱狂ぶりは理解できないことであった。ルーミーにとって，シャムスは，生涯の心の友，神秘道へと導いてくれる完全なる師，自己の分身，いやそれ以上の存在であった。シャムスはアラビア語で太陽を意味する。ルーミーにとっては，シャムスは，神の象徴である太陽となった。学校での講義，モスクでの説教に代わって，ルーミーはシャムスへの愛を陶酔的な抒情詩に歌い上げる。そして歓喜のあまり，くるくると回りながら踊り始める。踊りながら詩作する。以後ルーミーは詩作とダンスの生涯を送ることになる。

しかし，シャムスと暮らす喜びの日々は長く続かなかった。約１年後，シャムスは，忽然とコンヤから姿を消す。一説には，シャムスがコンヤを離れたのはルーミーの門弟たちの妬みの

コンヤにあるルーミーの墓

メウレヴィー教団による旋回舞踊の儀式

ためだともいう。あるいは，シャムスは，ルーミーが門弟を選ぶか，自分を選ぶかを試すために,ルーミーのもとを離れたのだともいう。ルーミーは狂気のようにシャムスを探し，ついに，シリアにシャムスがいることを知り，息子のスルタン・ワラドをシリアに送る。スルタン・ワラドは,無事シャムスをコンヤへと連れて帰り，ルーミーにとっては,再び喜びの日々が始まる。しかし，１年後，再びシャムスは姿を消す。そして，今度は，ルーミーの懸命の捜索にもかかわらず，シャムスは二度と姿を見せることはなかった。一説には,シャムスはひそかにルーミーの妬み深い門弟たちによって暗殺され，死体は井戸の中に投げ込まれたのだという。現在のコンヤには，ルーミー廟のほど近くにシャムスの廟がある。ルーミーの墓に詣でる人は，その前にまずシャムスの墓に詣でてルーミーの師に敬意を表さなければならいといわれている。この現在のシャムスの廟は，死体の投げられた井戸の近くに建てられたものだという。しかし，一説では，シャムスは，コンヤを去って故郷のタブリーズ（イラン西部の町）に向かう途中，ホイという小さな町でなくなったという。トルコ国境に近いイランの小都市ホイにもシャムスの墓と伝えられるものがあり，昨年の「マウラーナー年」を機に修復され，多くの記念行事が開催された。

さて,「太陽」シャムスを失い悲しみの淵に沈んだルーミーはどうなったのだろうか。おそらく，彼は，自己の中にシャムスを見出すことによって絶望から立ち直ったのであろう。以後ルーミーは，自ら太陽となり，弟子たちを神秘道へと導いていく。ルーミーの周りには，多くの弟子たちが集まり，ともに生活をする。かつてのような教壇からの講義というかたちではなく，禅師のように日常の対話の中で弟子たちを

導いていく。また，音楽にあわせて，ともに踊る。そして1273年，12月17日コンヤで没する。彼の命日は，彼の魂が肉体を離れ，神のもとへと召され，神と合一した日であるので「結婚の夜」と呼ばれ，現在でも，この日の夜，コンヤでは旋回舞踊の儀式が盛大におこなわれ，ルーミーの神との再会を祝う。

４．ルーミーの著作

ルーミーの名を不朽にしているのは，何よりも彼の残した膨大な数の詩である。彼の詩は二つの詩集にまとめられている。一つは，3,000を超える抒情詩（ガザル）が収められた『シャムス・タブリーズ詩集』であり，もう一つは『精神的マスナヴィー』という物語詩である。マスナヴィーとは，「二行押韻詩」という意味で，ペルシャ文学で，長い物語を詩に歌うときに使われる形式である。

ルーミー以前にももちろん，この詩形で多くの物語詩が書かれていたが，現在では「マスナヴィー」といえば，ルーミーの詩集がまず連想されるようになった。弟子たちへの導きとして，師の教えを書いた手引書のようなものがほしいとルーミーに懇願したのは愛弟子のフザームッディーンであった。この求めに応じて，ルーミーは，彼にマスナヴィーを口述筆記させる。霊感のおもむくまま，溢れ出てくる詩想を書き取らせて，口述は，時には夜を徹しておこなわれ，夜明けにまで及ぶことがあった。このようにしてできたのが，「精神的マスナヴィー」全６巻であり，その中に語られている物語は275に及ぶ。その中には，イソップのような動物寓話，ユーモアあふれる艶笑譚，過去の預言者たちや聖者たちの物語，コーランの中に出てくる話，歴史上の話など変化に富んでいる。もちろんすべての物語には深い神秘的な意味が隠されている。この大著は，20世紀の初頭にイギリスの大東洋学者ニコルソンによって英語に全訳され，ルーミーの欧米における名声は確立された。もちろん，ペルシャ語文化圏（イラン，中央アジア，インド・パキスタン，オスマン帝国）における「精神的マスナヴィー」の影響は測り知ることができない。古典ペルシャ文学最後の大詩人ジャーミーは，「彼（ルーミー）は預言者ではないが，天啓の書を持っている」と歌い，『精神的マスナヴィー』を「ペルシャ語で書かれたコーラン」とまで絶賛した。この『精神的マスナヴィー』全巻の序詞として巻頭におかれたのが絶唱「葦笛の詩」である。故郷の葦原から切り離された葦笛が，別離の悲しみと，故郷への憧憬を吐露するこの詩を暗唱できないイラン人はいないであろう。特に「マスナヴィー語り」という，昔から伝承されている独特の節回しで，葦笛の伴奏とともに歌われるとき，この詩の美しさはまた格別である。最後に日本のペルシャ文学研究の第一人者，黒柳恒男の翻訳による「葦笛の詩」の冒頭部分を紹介したい。

聞け，葦笛がいかに語るか
別れの悲しみをいかに訴えるか
私が葦原から切り離されて以来
わが悲しい音色で男も女もむせび泣く
私はこの切ない想いを打ち明けるため
別れで胸を千々に裂かれた人に逢いたい
己が本源より遠ざかる者はみな
合一の時を慕いて還ろうとする
どの集いにても私は哀しい音色を奏で
不幸な人や幸福な人と交わった
だれもが己が思いでわが友となったが
わが心の秘密を探った者はない
わが秘密は哀しい音色に秘められているが
目も耳もそれに気付く光がない
体は魂から，魂は体から隠されていないが
だれも魂を視ることは許されない
葦笛のこの叫びは火だ，風ではない
この火を持たぬ者は消え失せよ